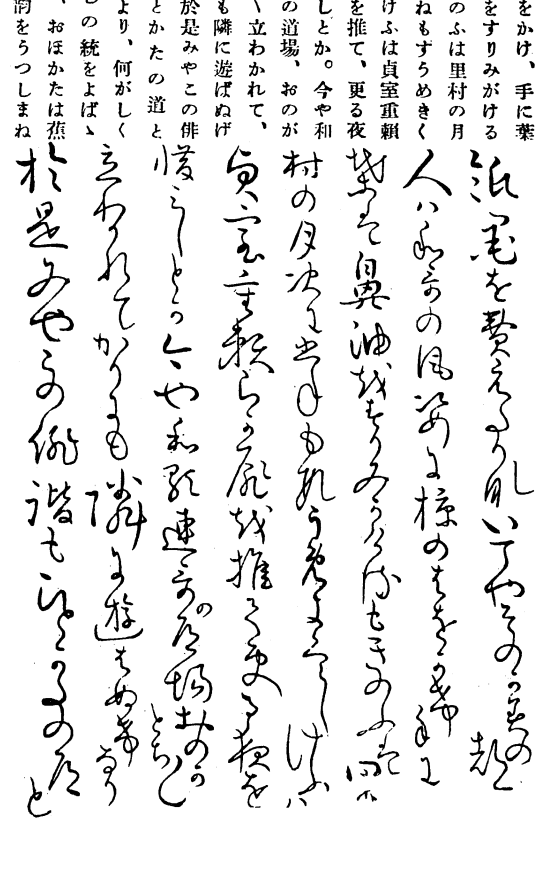
井華集

春夏

蕎麥と俳諧は田舍ぞよきとや。しかつぶやかれし世をおもへば、都はなほ柿園のむかし口なる人もこそおほからめ。我難波のうら人も口綱おもからぬ西山ぶりをまねぶには、蕉翁の雅致高情をも、人妻のよそばかりにや見過しけむ。是を恨みと歟、何某が十論古今抄、俳家の說雜數万言、むなしく紙罄を費えたりな。いでやそのかみの都人は、和歌の風姿に

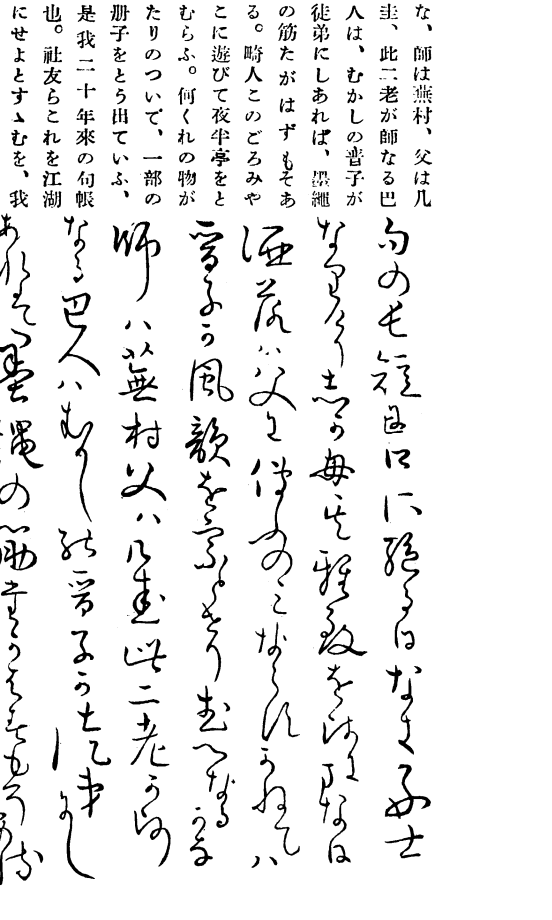
蕎麥と俳諧は田舍ぞよ
きとや。しかつぶやか
れし世をおもへば、都
はなほ柿園のむかし口
なる人もこそおほから
め。我難波のうら人も
口綱おもからぬ西山ぶ
りをまねぶには、蕉翁
の雅致高情をも、人妻
のよそばかりにや見
過しけむ。是を恨みと
歟、何某が十論古今抄、
俳家の說雜數万言、む
なしく紙罄を費えたり
な。いでやそのかみの
都人は、和歌の風姿に



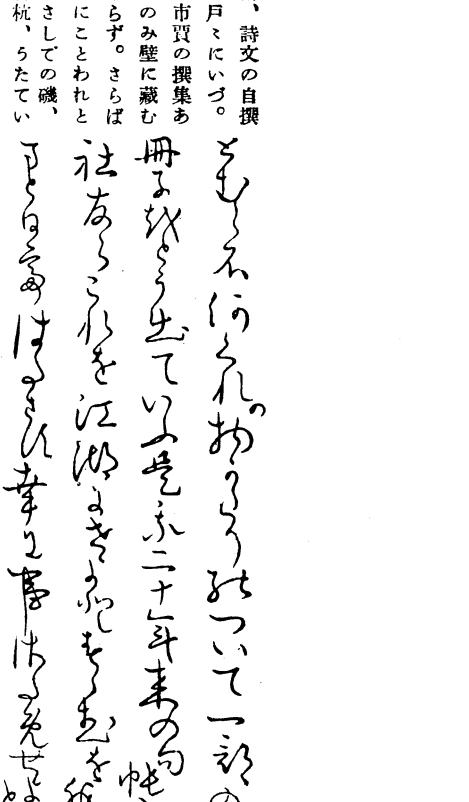
椋のはをかけ、手に葉は鼻油をすりみがけるも、きのふは里村の月次にひねもすうめきくらし、けふは貞室重頼らが扉を推て、更る夜を惜みしとか。今や和歌連歌の道場、おのがどち〳〵立わかれて、かりにも隣に遊ばぬげなり。於是みやこの俳諧もひとかたの道と成んてより、何がしくれがしの統をよばゝる人も、おほかたは蕉門の風韵をうつしまね

ぶには、爐邊のかけこ
碗に信濃伊吹の挽おろ
し、又なつかしまるゝ
みやびわざとなりんて
ぞ、夫も是もみやこの
ゐなかにおとるべきか
は。我友几董は、御溝
水の流にうぶ湯をひき
て、みどろが池の蘆の
角髪より、俳句の長短
口に絶る日だき好士な
りけり。しかも其雅致
を師にまなび、洒落は
父に傳ふのみならず、
かねては晋子が風韻を
宗とせり。むべなるか

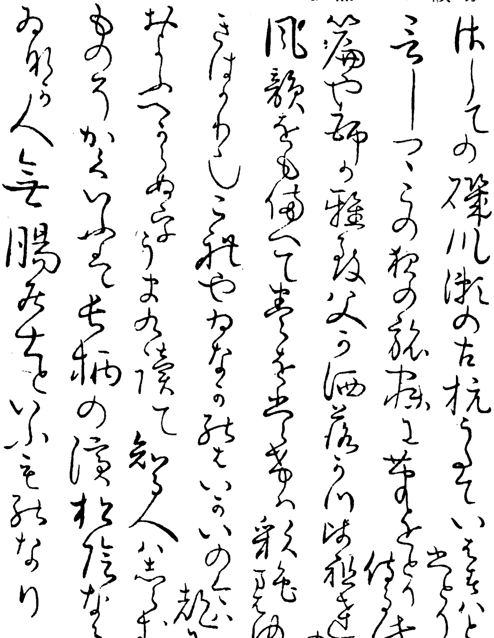
な、師は蕪村、父は几圭、此二老が師なる巴人は、むかしの普子が徒弟にしあれば、墨繩の筋たがはずもそある。畸人このごろみやこに遊びて夜半亭をとむらふ。何くれの物がたりのついで、一部の册子をとう出ていふ、是我二十年來の句帳也。社友らこれを江湖にせよとすゝむを、我まどひてはたさず、幸に事さだめせよと。畸人云、兄しらずや、世



を見れば、詩文の自撰日を逐て戸々にいづ。和歌には市買の撰集あり、俳士のみ壁に藏むべきにあらず。さらば是をはしにことわれと也。あゝさしでの磯、川瀬の古杭、うたていはずばとひとり言しつつ、この夜の旅寐に筆をとり侍る。此篇や師が雅致、父が洒落、かつ師祖達の風韻をも備へて、卷をひらけば彩色まばゆきばかり也。これやゐなかのはいか



いの、今は都におよぶべからぬを、うまく讀て知る人はしらむものぞ。かくいふは長柄の濱松陰なるゐなか人無腸居士といふものなり。



自叙

明和庚寅のとしより、かりそめに記し置る家集めけるもの數册子になれりけり。此頃秋の夜のつれ〴〵なるまゝ、とうでゝをりく〳〵よみゝるに、うたて庭の木草のいや茂りにはびこり、古井の水のながめに溢るゝが如く、いとわづらはしきばかり多かりければ、やがて筆とりてかたはしに墨ぬり打消しぬべくおもふを、其をりし人ありて、まなむざんや、そが中には年ごろひとの聞知たるもあらむ、又みづから頭いたむまで案じこうじたるも有べし。いかにさばか

自叙
明和庚寅のとしより、かりそめに記し置る家集めけるもの數册子になれりけり。此頃秋の夜のつれ〴〵なるまゝ、とうでゝをりく〳〵よみゝるに、うたて庭の木草のいや茂りにはびこり、古井の水のながめに溢るゝが如く、いとわづらはしきばかり多かりければ、やがて筆とりてかたはしに墨ぬり打消しぬべくおもふを、其をりし人ありて、まなむざんや、そが中には年ごろひとの聞知たるもあらむ、又みづから頭いたむまで案じこうじたるも有べし。いかにさばか

り無下の事はなし給ふやと、泣ばかり制しとゞめらるゝにぞ、亦此志をもうばひがたくて、さらば是を二卷ばかりに書約むべしとて、昔のも今のも、鈍きさかしきに拘らず、淡き濃き打まじへ、つきづくしく撰びあらためつゝ、扨此双紙に名をかうぶらせよといへば、かの人とみに井華集と號く。いかなる故やらむ我知らず。しらざれども何となくこころにかなひたれば、漫に表題となし置ぬ。于時天明七年丁未秋長月のはじめ、洛東聖護院の杜陰なる春秋菴にして

九董詐善書

うぐひすの卯時雨に高音哉

鶯の隣へ逃てはつねかな

うぐひすやいせ路を出る暦彫

偶感

羽洗ふ鶯も見ゆ紙屋河

鶯の脛にかゝるや枯かつら

市中

鶯の二度來る日あり來ぬ日がち

鶯のたつ羽音して高音かな

初音して鶯下りぬ臼のもと

金衣公子

うぐひすや小太刀佩たる身のひねり

鶯や日の出の後の霜ぐもり

笹根にて

うぐひすに松明しらむ山路哉

新鶯

うぐひすの訛かはゆき若音かな

梅花見にこそ來つれ、とうたひて

鶯よ何がこはうて逃じたく

うぐひすの影ぼし見えて初音哉

狂雲斬佳月

梅がゝに狂ふがごし月の雲

埒もなき荊が中の野梅かな

見ぐるしき壘の焦や梅の影

梅ちるや京の酒屋の二升樽

山人に花咲ぬやとたづねれば

咲散もいさしら梅の伏見人

をちこちや梅の木間のふしみ人

遠望

しら梅に餘寒の雲のかゝる也

檣を蹈で罪得べしこの梅が宿

狼藉を從者とはるや垣の梅

白梅にこはそも氷雨の降日哉

但聞人語聲

梅寒し奴にくるゝ小盃

ぬつくりと寐て居る猫や梅の股

から鴉や梅の中行懐手

とりべ野舟岡の煙立さらでのみ

と、無常迅速の世のならひなが

ら、春の日のうらゝかなるけしき

には、人の命ものばはる心地す。

野梅咲て挽歌きこえずなりにけり

耕さぬ人に見らるゝ野梅哉

木に殘るこゝろや手折梅の花

梅の春鰒かくばかり白かつし

詩をうたひ、畫を工のあまり、

阮咸が風流をたしなむ者あり。

梅の窓に三線ひくや毛唐人

離別

戀々として柳遠のく舟路哉

若柳枝空さまにみどりかな

春水

わたりふたつ見えて夕日の柳哉

青柳やはつ神鳴の雨の後

寒かりし月を濁らす柳かな

辛崎の松は花より朧にて、とい

へるは、さゞ浪やまのゝ入江に

駒とめて比らの高根の花を見る

哉。たゞ眼前なるはとありける
とぞ。

比良の雪大津の柳かすみけり

犬に逃て庭鳥上る柳かな

さし木の柳の生立たるを愛して
寓居の柱に書。

老そめてとにめでたき柳かな

しばし見む柳がもとの小鮒市

春風如刀

貌いたき風のよそ目に柳哉

子日

手を添て引せまいらす小松哉

まないたの七野に變くわかなかな

七草に鼠が戀もわかれけり

蛤の煮汁かゝるや春小袖

寶引の宵は過つゝあはぬ戀

さめたらんほど念佛し給へと、
法然上人の答給ふ。いとたふと
かりけり。

氣にむかばねぶつ申せよ御忌の場

着だふれの京を見に出よ御忌詣

やぶ入の脛をしかくす野風哉

やぶ入や命の恩の醫師の門

藪入やついたち安き中二日

やぶ入の我に遲しや親の足

五雲、東府の俳士を催して、北野
聖廟奉納の句勸進し侍りけるに

白梅や機婦にねたまぬ花一重

田家

大事がる柿の木枯て梅の花

園日涉以成趣

荒につく畠の柳みどりせり

賣家のいせが軒ばや猫の戀

轉び落し音してやみぬねこの戀

琴の緒に足繋がれつうかれ猫

餘寒

よき衣に春の寒さをしのびけり

正月や胼いたましき采女達

春寒く二ッ殘りし鷄卵酒

春水滿四澤

あふれ越野澤や芹の二番生

日は落て增かとぞ見ゆる春の水

さす棹の拳にのるや春の水

五器皿を洗ふ我世やはるの水

川風寒み千鳥鳴也といへば、人
をして炎暑にも寒からしむとか
や。あるは蛙飛込と、水音を觀じ
たる言外の餘情、それらの妙境
は及ぶべくもあらねど

夕されば千鳥とぶ也春の水

磯山や小松が中をはるの水

野も山も冬のまゝじやに春の水

雪に折し竹の下行春の水

畫に光琳有、俳諧に鬼貫アリ。

行水や春のこゝろの置所

市陌

繪草紙に鎭おく店や春の風

春風のこそつかせけり炭俵

途にあふて手紙披ケば春のかぜ

少年行

春雨や簑の下なる戀ごろも

春雨に似氣なき雷の響哉
春雨や造化へもどす莖の壓
春雨や鼻うちくぼむ壬生の面

薄ゝ春雲籠皓月

おぼろ夜や南下りにひがし山
戯男に道蹈かへんおぼろ月
あじろ木のゆるぐ夜頃や朧月

三盃の酒にうかれて風雲の癖し
のびがたし。

しやせまし志賀の山越おぼろ月

塩山亭

落ぬべき西山遠しおぼろ月
春の夜や袖を蹈つぶす小板じき

海邊の曙といふ題に

むらさきに夜は明かゝる春の海
春の夜や連歌滿たる九條殿
缺盆のよし野もゆかし蕗のとう
物咎ゝ伏見の畑や蕗の薹

南都にて

熊坂に春の夜しらむ薪かな
元日の醉詫に來る二月哉
二日灸花見る命大事也
如月や一日誕す海の風
傾城に莨蒻くはす彼岸哉
一休は何とおよるぞ涅槃の日

或山寺にとまりて

水に落し椿の氷る餘寒哉

奉納いせ太神宮

有がたさ餘りて寒し神の場

畵賛

紅梅に睡れり衛士の又五郎
紅梅に衣もどし行や盜人等
野烏の巣にくはへ行木芽かな

田家

乙鳥や雪に撓みし梁の上
燕や流のこりし家二軒
むら燕牛の胯ぐら潜りけり

市鄙

つばくらや夜の鮓買の驚かす
村深し燕つるむ門むしろ

淀鳥羽のわたりにて

乙鳥や輸の小魚つかみゆく

旅意

三條をゆがみもて行霞かな
こたつ出てまだ目の覺ぬ霞哉
待日には來であながまの蜆うり
干鱈やくつゝじの柴や燃んとす

遊糸白日靜

いとゆふにいとしづか也松の風
陽炎や酒にぬれたる舞扇
まさご路や陽炎を追波がしら

土脉潤起

燒寺も春來て萩のわか葉哉
かげろふや泥脚かはくくわい掘

晋子七十年懐古

夕がすみおもへば隔ッむかし哉
八巾の尾の我家はなるゝうれしさよ

海士の子や舟の中より紙嵩
颱(つむかぜ)のそなた長閑にいかのぼり

西行忌

骨をもて作れば和歌の聲美也

點印笥の裏書を望れて

濱の眞砂路の遠き近きをうか
がひつゝ句の甲乙を撰に、丹
青の色をもて分ち侍る。

えりわけむ眞蘇枋の小貝海苔の屑

做素堂口質

雁がねも春の夕暮となりけり
風呂の戸をあけて鴈見る名殘哉

客中野遊吟

紅裏は屋敷女中歟遠雉子
きじ鳴や暮を限の舟わたし
虹の根に雉啼雨の晴間かな

句合に

三井寺の鐘はくるゝに雉子の聲
小松野ゝ蕨薬廣に成にけり
土を出て市に二寸のわらび哉

野を燒や小町が髑髏不(ものいはず)言

野行

抜捨し野葱土かはく春日かな
摘草や印籠提し尼の公
道の記に假の栖やつく〳〵し
たんぽゝや五柳親父がしたし物

芭蕉菴の松宗和尚へせうそこに

椎の葉に盛こぼすらし春の雪
山かげの夜明をのぼる雲雀かな
起臥や身を雲介が友ひばり

應擧が畫に

春のあはれ雉子うつ音も霞けり

嶋原の歸さ

桐油嗅き駕に蛙を聞夜哉
飛〳〵に芹の葉伸や鳴かはづ
啼蛙神もはじめて鳴ル夜かな
三日月の影蹈濁すかはづ哉

村落

さむしろや蝶も卷込俄あめ

舟につむ植木に蝶のわかれ哉
峰の巣に爰源八の宮居かな
畑をうつ翁が頭巾ゆがみけり
苗代やある夜見そめし稻の妻
初草に心づよさよ春のしも
はづかしと客に隱すや田螺あへ

亡母二十五回忌

花の雲ばさちの數と經りにけり
咲をさへおどろくに散はつざくら

禁城の御みぎりを徘徊して

いとまあるけふまだ咲ぬさくら哉
散と見し夢もひとゝせ初櫻
そゝと(か)しきあるじが接木おぼつかな
僧に成兒にはくれじ雀の子

上巳

雪信が屏風も見えつ雛祭
うら店やたんすの上のひな祭
雛酒や汐干を語る國家老
雛の日や翌旅にたつ客もあり

桃の日や雛なき家の冷じき

盡よし浦にて

落かゝる日に怖氣だつ汐干哉

鯛を切鈍きはものや桃の宿

もゝ咲ぬ誰喰さしの實生より

加持すとて群來る人や桃の宿

初瀬にて

こもりくの峰にさゝれないと櫻

淵青し石に抱つく山ざくら

松伐しあとの日なたや山櫻

雨中多武峯

雲を蹈山路に雨のさくら哉

咲出てあらせはしなの櫻かな

夜は嵐の吹ぬものかは

けふ來ずて見ぬ友ゆかし山櫻

月のあかき夜はたのみある櫻哉

東山吟歩

大坂の遊女かしらずさくら狩

さむしろに錢置花のわかれ哉

勅願のたふとくかすむ櫻かな

絶壁懸河を凌て日毎に越來るは、いと危き世わたり也けり。

筏士の嵯峨に花見る命かな

はじめて吉野山に遊びける時、あけぼの夕暮の花をありきつゝ

二日見ていかさま花のよし野山

芭蕉翁百年忌

花といふ論定りぬさくら人

大和の何來といふ人、はつせ山のかたはらに蕉翁の碑を封溝し、こもりく塚と號く。翁や生涯漂泊を恒とし、五天に白髮の勞をいとはず。片雲の風にしたがひとゞまる所を知らざるがごし。

雲水の香をせきとめて花の塚

雨日仁和寺に遊ぶ。

晴るよと見ればかつ散雨のはな

門賣の花屋が手よりちる櫻

かしこくも花見に來たり翌は雨

花過て雨にも疎くなりにけり

花に來て詫よ嵯峨のゝ艸の餅

葉櫻の中〳〵ゆかし花の中

須磨

秋といひし哀をすまの山ざくら

女夫して住持醉しぬ花に鐘

元日の雲かさなりてさくら哉

夜櫻に青侍が音頭かな

分題飲中八仙

宗之瀟洒美少年

舉觴白眼望青天

醉て猶眼凉しやさくら人

慮外して祿かづきたる花見哉

植木屋の花うれぬ間に盛かな

觀想

廿とせの小町が眉に落花かな

花競ふ寺としもなしひがし山

底たゝく春の隅より遲ざくら

少年行

花手折美人縛らん春ひと夜

打とけて我にちる也夕さくら

君見ずや花に我等がおとし文

西行上人の意を追て鬼貫が口拍子に倣ふ。

來たか來い見すに置てもちる花ぞ

識盈虛之有數

百花咲てかなしび起るゆふべ哉

花過てよし野出る日やわすれ霜

長き日の春中に暑しおそ櫻

遲き日やひとへからげる草履道

影遲し魚餌について日三竿

對酌

遲き日や清ルは昇る鮓あへもの

長日や宿替の荷の殿ス

長日を羽織着ながら寐たりけり

題しらず

蹇の顏ほがらかに春日哉

出代の跡濁さじやぬか袋

出かはりし身のかたづきや草枕

佐久良太比之辭

かの大臣の都に潮を汲せ給ひし風流には似氣なけれど、鯛の塩竈燒といふ物を製して、をの〳〵箸を下し、盃を銜むの興に乘じつゝ、やがて醉中の吟を諷ふ。其吟二句。

腸を壯丹と申せさくら鯛

山葵酢に肝をねらふや丸炙

春眠不覺曉

春の泊鯛呼聲や濱のかた

門口に風呂たく春のとまり哉

關札やどゝなたのとまり春夕

僕ガ妻の絹着て歸る春のくれ

今着キし澤菴漬て春ゆふべ

無醉詩

山吹や胡粉の見ゆる雨の後

有餘滿

山吹やさしぬき濡るゝ歩わたり

棣棠の影さす扨は夕月夜

逆旅

山吹にめで損ひやわるい宿

白馬金鞍入誰家

すみれ蹈で今去馬の蹄かな

菫踏で石垣のぼる戀路かな

菫野や今見し昔なつかしき

五加木垣都の客を覗きけり

家ぬしの摘にわせたるうこぎ哉

奉納玉津島

おもしろき名の有がたやわかの春

青海苔や石の窪ミのわすれ汐

鮎汲や喜撰が嶽に雲かゝる

柑子を惜しみて砌を圍たる人の心こそいやしまるれ。

あだ花と聞ばけだかし梨のはな

いざ春に生のうら梨花は今

紺かきが竹虎がくれや花林檎

月中の盜人落よ李花白し

安良居祭

やすらゐや鬼も籠れる若草野

ばゝ嗅の肩ぬぐ空や御身拭

朱雀野にて

菜の花や雲たち隔つ雨の山
菜の花の紀路見越すや山のきれ
雪蹈にて辷る山路のつゝじ哉

尋蝶夢不遇

草の戸や藥を嘗に蝶の留主
爐ふたひで菜といふ病うつりけり
表具師が無沙汰呵りつ爐の名殘

芳野の山廻りして

春過て夏箕の川や藤のはな
藤咲て田中の松も見られけり
白藤や猶さかのぼる淵の鮎
源氏などほのめく藤のあるじ哉
誰願ぞ地滅縛りし藤の花
藤橋やおもき身を越す孕鹿

花に醉、鳥にうかれ、あるは青樓の宿酒に三春の曉をおぼえざるも、又風流酒落のためにつかはるゝ奴なるべし。

死なでやみぬいたづらものよ暮の春
閑の戸に鎖おろす春の名殘哉

春暮ぬ醉中の詩に罍ぬらん

對友人

行燈をとぼさず春を惜しみけり
大名のひと夜鳥原くれの春
暮んとす春の狂ひや雹ふる
草臥て寐し間に春は暮にけり
還俗のあたま痒しや暮の春
行春や狸もすなる夜の宴
めづらしと見るもの毎に春や行
おこたりし返事かく日や彌生盡
ほとゝぎす古き夜明のけしき哉
月よりは上ゆくものかほとゝぎす
子規甑おとしの折からに

靜座

睡氣さす魔を蹴て行や子規
ほとゝぎす啼かと待ば蛛の糸

芭蕉菴にて

時鳥あとは松吹あらし哉
ほとゝぎすいかに若衆の聲がはり
ほとゝぎす咒詛の釘うつ梢より

詩仙堂の邊にて子規のしきりに鳴けるにぞ、丈山先生の、わたらじなせみの小河の、といへる歌をおもひ出て

ほとゝぎす鴨河越えぬ恨かな
あかつきや地震の後の杜鵑
ほとゝぎす天狗の礫ゆるせかし

丹青の彩をからず、うす墨を引はえたるどきよこ雲のたえ間より

探幽があけぼのゝ夢や子規
伏見の夜急に更たり杜鵑

峨山開子規

まぼろしの花忘れめや蜀鳥

かさねばうとしいざ二人ねん

寒しとは小町が嘘よほとゝぎす
曉のかねてしゞまやほとゝぎす
子規けふはきのふと成夜かな

あればとてたのまれぬ哉堅はまたきのふとけふはいはるべければ　西行上人

亂蓬欺子規

飛啼の若音あやなし時鳥

松浦佳則亭にて、短冊かけに句を望みけるに

とばしりし墨も頓阿の杜鵑

ほと〻ぎす路通はもとの乞食哉

五斗俵の地をはなる〻や更衣

袷着てむかしごゝろや花の塵

病ム人のうらやみ顔や更衣

誤落塵網中

町内に家振舞ありころもがへ

馬の脊にかろく跨る袷かな

小褄より針ひねり出す袷哉

ある家にて

牡丹二代連歌は劣るあるじ哉

百兩のなき魂もゆるぼたん哉

ぼたん畑小草に箸を下す也

或御方にて

牡丹芳御坊主蜂にさゝれたり

ねたまるゝ人の園生のぼたん哉

此寺のぼたんや旅の拾ひもの

閨怨

短夜や妹がほむらの有あかし

みじか夜に敵の後を通りけり

旅泊嘆

短夜や空とわかるゝ海の色

みじか夜を四郎兵衛が假寐かな

短夜や蠏の脱に朝あらし

後朝

短夜や伽羅の匂ひの胸ふくれ

みじか夜は犬の鼾に雀かな

兵庫にて

短夜や蛸這のぼる米俵

短夜の香をなつかしみひと夜莖

今少しなれぬを鮓の富貴哉

なれきとやいざとけ眞木の柱鮓

兼好法師の口まねして

下部等に酒もり過そ鯖のすし

ほと〻ぎす待頃、北潟にて漁し鯖のうをに、活ながら薄しほきりたるものを早鯖といふて、都かたにて初がつほに代るもの也。

沖塩のはやせを穢や蓼の雨

卯花に加茂の酸莖のにほひ哉

千里尊羹未下鹽豉といふ題をもて、おの〳〵句を合せるに

幽菴が便ゆかしきぬなは哉

かきねにきえぬ雪と見るまで、と詠じけん

うのはなに寒き日も有山里は

明いそぐ夜のうつくしや竹の月

白罌粟に煤はく家や加茂の里

たれこめて祭見る家や薫す

荒たる家の籬さし覗きたれば、いやしからぬ女の里居とおぼしくて引みゐたる、いとゆかしくおぼえけるに

卯花や薄痘がほにしろいもの

筍に捨り添たりしやがの花

鳥散餘花落

かきつばた魚や過けん葉の動き
等閑に杜若咲く古江かな

伏水任口上人の舊房にて

よし吹やわか葉ながらの青簾
風して藤あらはるゝわか葉哉
祟なす樹もえだかはす若葉哉
わか葉して親と子踈き雀かな
葉櫻に一木はさまやわか楓
轉に虫も聲添ふわかば哉

奉納石清水

君が代や今もわか葉の男山
むら雨の音しづまればかんこどり
かんこどり樹下に虱を捫る時
ねぶの木のその花鳥や布穀(かんこどり)

布引瀧

山鳥の尾上に瀧の女夫かな
瀧見して袖かき合すあはせ哉

郊外

麥うたや野鍛冶が槌も交へうつ
麥歌の聲まね行や琵琶法師
麥秋や埃りの中を薩摩殿
麥秋の草臥聲や念佛講

泰里が姉古友、洛にて薙髪し侍るに

うき草を拂へば涼し水の月

家事の公務に就て東武に赴く菱湖に餞す。

旅涼しうら表なき夏ごろも

戀

しのぶ艸顏に墨つく夏書哉
すゑ摘の母屋の柱に飛蟻かな
小角力が舊きにかへる酒煮哉

端五

髭黑の上手又出よくらべ馬

此非吾所以居處子

菖蒲太刀芝居に近き家かへむ
さみだれや船路にちかき遊女町

五月雨の猶も降べき小雨かな
さみだれの夜は晋もせで明にけり
さみだれの空や月日のぬれ鼠

二日とまるは下〻の下の客

宗鑑が竹の挽香を蚊遣かな
蚊やり木にたま〳〵沈の匂ひ哉
我につらし起て蚊をやく君が貌
蚊柱や蜘蛛の工のうら手より
鷄の寐つかぬ宿の蚊やり哉
蚊はつらく蚊遣いぶせきうき世哉
君が手のつめたさ見たり軒の月
吹折て蓁のむせびしかやり哉

夕殿螢飛思悄然

あるじなき几帳にとまる螢かな
うき舟や痞おさへてほたる狩
水うみの低きに就て行ほたる

みたらし河に遊て

行水に誘れがほの花藻哉
川越(こえ)し女の脛に花藻哉

葭雀や曉て一二のみをつくし
川風や鵜縄つくらふ小手の上に
廣ごらぬ網や貴人の肱白し
えものある網やうれしきひそみ聲

有感

生て世にひとの年忌や初茄子
初瓜の價きのふのむかし哉

白砧百ケ日に

橘のかたみの衣に夏書せん
放參の鐘鳴かたや夏木立
神鳴の上りし松や夏の月
古君の化粧上手や夏の月
抜身敗と鞘のひかりや夏の月

堀川百首に、ゆひもやとはで早苗とりてむ、とあるに

屈はれて老なるゆひが田歌かな
湖の水かたぶけて田植かな
玉苗やけふ手よごしの二三反

村居

かしこくも盜人は來で水鶏哉

神樂岡崎の隱士高橋氏、住る庵の四隅より望るところの山岳を題して、詩歌連俳の詠を集めらるゝに、予は生駒山を得たり。

角豆とる籬のそなたやいこま山

金福寺芭蕉菴再成

角文字のいぼりに題すかたつぶり
三日月の木ずゑに近し蝸牛
ひよんの葉の落てありくや蝸牛
罪深く夜を寐ぬ蠅や瓜の皮
毛虫這背中おかしや郭藁駝
いとし子に毛虫とりつくはし居哉
代官に妖て瓜喰ふ狐かな

扇合に

流れ來てなでしこによる扇かな
夜歩行の露にとぢたる扇哉

讀李斯傳

則なる扇も喰らふ鼠かな
暗がりへ要のはしるあふぎ哉
うたゝ寐の夢想書とる團かな

秋ならぬ閨の團扇や君と我

祇園會

うす痘の見えずていとし鉾の兒
酒ゆるす醫師も見えてゆふ涼
涼しさや遠く茶運ぶ寺扈從
すゞしさや絹着ておはす老和尚

雨後、大德寺に遊ぶ。

涼しさやこぼれもやらぬ松の露
涼しさや花屋が店の秋の艸

醉登高閣

すゞしさや遣水うつるかけ鏡
涼しさや再びともす燭の下

あかしに遊ぶ。

こよろぎのいそ魚買んゆふ涼
夏痩やあしたゆふべの食好み
撫子に霜見むまでの暑かな
水のめば腹のふくるゝあつさ哉
あつき日の都や鯛の耻さらし

金剛杖いかめしく、突ならし法螺貝かまびすく吹立行つらつき

いと愛なし。

暑日や御嶽まうでのさばき髪

難波橋の邊に舟泛て遊びけるに江南江北の遊客の舟花やかに、所せきまで漕出たり。

我を招く玉むし出よ涼ぶね

夜涼や露置く萩の繪帷子

醉中

葛水や王敦を憎む女あり

くず水やうかべる塵を爪はじき

我等亦佛子

蠶嚙品の虫殺さじと拂けり

贄物のいく代めでたし虫拂

着すぐれぬ伯母の小袖や土用干

かなしくす小姫が貌の熱沸かな

汗拭や左袒ぐ夏芝居

あとさまに小魚流るゝ清水哉

山寺や緣の下なる苔しみづ

穢多むらのうらを流るゝ清水哉

山吹のわすれ花さくしみづかな

田中勘左衛門が愛蓮は、周茂叔をあざむくと聞え侍りしか。

茂助田に愛すともなき蓮かな

いゐの香に朝氣の蓮を愛す也

わけ入や浮葉乘越蓮見舟

けふもまた午の貝こそ吹つなれ

ひつじの歩みちかづきぬらし

夕だちやけふのあゆみも未申

ゆふ立やよみがへりたる駑馬

白雨や水晶のすゞのきるゝ音

夕だちや傘を借す世は情

夏日

雲峯大工屋根やを憐めり

飈のおし動かすや雲峯

かげろひし雲又去て蟬の聲

手に持ば手にわづらはし夏羽織

わすれゐし帷子ありぬ妹が許

難波梅女が母薙髮しけるよし告こしけるに

剃捨し髪や涼しき蓮の糸

夕がほや鼠棐るめくら兒

万民雨を悦ぶ。

喜雨亭に夕風ねたる青田かな

難題を集て探りけるに

桑の實や兒にまいらす李氏が環

瓜冷す井を借りに來る小家哉

待うけて醫師にすゝむる甜瓜哉

酢陶を水主あやまちそ沖膾

夏日鳥卵の羹を愛し、冬夜鯉鮒の冷味を賞す。よろづに珍しきを好むは、長安豪華の人氣なりけらし。

新芋に先六月の月見かな

夕がほやくれと呼るゝ油賣

畫顏にしばしうつるや牛の蠅

孤村

禰宜ひとりみそぎするなる野河哉

名越の神事終ば、やがて水面に立たる五十串を拾ひて農家の守護となす事、かねて近在の土人川岸に棄り居て、我一と爭ふ事

也。

いぐし奪ふ人の羽音や御祓川

あかつきの神鳴はれてけさの秋
秋たつや宵の蚊遣の露じめり

形影自相憐

起〳〵の鏡するどし今朝の秋
馬鹿づらに白き髭見ゆけさの秋

立秋の翌庚申なりければ

明てけさ鍋の尻かく秋の聲
初秋や旭出ぬ間の寺まいり

日々醉如泥

今朝秋の腹に酒なしものゝ味

乞巧奠

振袖の憂をはたちやほし祭
梶の葉に配あまるや女文字
浪越さぬかさゝぎの羽や天の川

事しげき女をあはれむ。

髪とくをせめて願や星あふ夜
星合も山烏の尾のわかれ哉

乙未秋十哨

よみ歌をひそかに星の手向哉
瘧落てあさがほ清し軒の外
彩らぬ切籠の總に秋の風
島原や躍に月のむかし貌
桔梗ならをみなへしなら露にぬれて
やはらかに人分行や勝角力
花火盡て美人は酒に身投けむ
乞兒かへる徑の木槿しぼみけり
虫ノ聲非ノ一ニ　おほとのあぶらしろき迄
賭にしてとうがらし喰なみだ哉

感懐

松風にかなしき聲や高燈籠
宵闇の氣のおとろひや高燈籠
死なでわれむかしの戀を魂祭
玉棚の親に見せけり錢五貫
魂だなや腰ぬけどのゝ居はからひ
攝待の茶にかき立る藥かな

やぐら、かたすかしなどは聞なれたる手なるを、著聞集に古き名の見えたるぞゆかし。

とし又きやつに勝れな腹くじり
御相撲や五年前見し美少年
胸あはぬ衣かづきけりすまひ取
闘取や妻は都のをみなへし

遊高臺寺

萩に遊ぶ人たそがれて松の月

御しのびの下山や萩のから衣

狩の風北より來り西よりす

優妓中村鯉長はかぬて佛の道に志深く、四天王寺の邊に終の栖をもとめ、柴の戸に明暮かゝるしら雲をいつ紫の色にぞなさむ、といへる法然上人の御詠歌を念じつゝ、終にめでたき往生の素懐をとげたり。かれが所縁のもの追悼の句をもとめけるに

むらさきに見よや桔梗を手向艸

きちかうの露にもぬれよ鞠袴

朝がほや稚き足に蚤のあと

あさ顔や惜氣せぬ妻うつくしき

朝いする人をおどろかして

蚊屋はづせ葬の花の赤むほどに

鉢植の葬も見ゆれ檜垣舟

ある人の別墅にて

葉がくれに虫籠見えけり庭の萩

おもかげの幾日かはらで女郎花

生添ふや小松が中のをみなへし

いせのつと入といふ事を頓入て望一に誰とさゝれけり

市に隱る二百十日はきのふ也

又平が畵もぬけ出ておどり哉

ふり附のめし喰こぼす躍かな

つゝみ合し夫婦出くわす踊哉

電光石火の世を觀ずる人あれば、戀慕の闇に身を惑ふもの有。

いなづまやみそか法師は老なりき

稻づまや隣の藏も修覆時

いな妻や壁を逃さる蜘のあし

雨後

いなづまや空にも雲のわすれ水

稻妻や山城の山河内の河

稻妻のおさまるかたや月の雲

鬼貫五十年懐舊

淋しさのとし〳〵高し花すゝき

刈とりてもとのみだるゝ薄哉

果武よりの歸さ、しらすかふた河の際より、松間の不二をかへり見る所あり。

伸上る富士のわかれや花すゝき

朝露や膝より下の小松原

夜坐閑

虫の聲艸のふところはなれたり

鳴神のたえ間や夜半のきり〳〵す

蘭の香や雜穀積たる船の底

蘭を愛す賓主の座いまだ定まらず

寓居園中十三唱之内

物しらぬ妻と撰ぶや虫の聲

今借した提灯の火や草の露

旅せよと我脊にあまる藜哉

稻荷山

とんぼうに蟲飛かつ朝日かな

古墳添新土

なき人のしるしの竹に蜻蛉哉

燒捨の人のむくろに秋の風

つり鐘に椎の礫や秋の風

秋風や捨ば買うの越後縞

たからなを握もちてといへる兒

とは、またやうかはりにたれど

露草や家中の兒の剃こかし
朝ぎりや施米こぼるゝ小土器
あさ霧や二人起たる蓬所
霧こめて途ゆく先や馬の尻
霧深し何呼りあふ岡と舟

八月十四日新居會

八九分に新酒盛べし菴の月
待宵をたゞ漕行や伏見舟

月前懐古

名月や朱雀の鬼神たえて出ず
新月に蕎麥うつ草の庵かな
水ばなに月澄わたるひとり哉

湖上

名月や辛崎の松せたのはし

青樓曲 二句

名月や金でつらはるかくや姫
月今宵やり手がうたのむかしぶり

淀夕陽迎葉月

艸の戸や秋の日落てあきの月
まつ毛にも露おく秋や夜半の月

清夜の吟

うち曇秋は多けれ月今宵
名月や蟹のあゆみの目は空に

良夜雨

見ぬ月の千〻に悲しき雨夜哉
船頭と月見あかしや肴きれ
淺河や月をよけ行歩わたり

駿府の旅寐をおもふ。

名月に富士見ぬ心奢かな

わかのうら

ゆく月や國なきかたに田鶴の聲
欠して月譽て居る隣かな

待宵は曇、良夜は雨を帶たり。

いさよひは雲ひとつなき寒さ哉
十六夜や闇より後の月の雲
いさよひやかざめを逃す汐がしら

悼太祇

十六夜やひとり缺たる月の友

臥待月の夜、湖邊の水樓に遊びて

月しろや金の波をまくら上
黑谷の初夜きく月の野川哉
返照らす有明の月や小便所

戀

夜べ逢ていとゞなつかし秋の暮
何いそぐ家ぞ火とぼすあきの暮
かなしさに魚喰ふ秋のゆふべ哉

旅思

馬下りて馬夫がわかれも秋のくれ
朱をそゝぐ入日の後は秋の暮
衣着よと母の使やあきの暮

述懐

老そめて戀も切なれ秋夕

白箋の翁といへるものは、元政上人の隠逸傳にも見え侍りしか。

とうがらし賣白頭の翁かな
うき旅や酒に擲ッとうがらし

待戀

幾度歟碪うちやむよそごゝろ
人妻の隣うらやむきぬた哉
熟柿の落てとばしる砧かな

遊子

ひとの國にやゝ馴るゝ夜の碪かな
比叡に通ふ麓の家のきぬた哉
指うちてしばらくとやむ砧哉
行舟に遠近かはるきぬた哉
仁和寺や門の前なる遠碪
衣うつよ田舍の果の小傾城

矢背の隱風爐に、ある人を訪ひて

養生の夫婦別在鹿のこゑ

西行上人の、世にこのもしき住居也けり、とよみ給へるに

柴の戸にいやしくもあらず鹿の聲
戀〳〵て田に蹈かふる男鹿哉
月と成闇となりつゝ鹿の戀

旋轉俯仰發揮我巨巨之聲聲韻不凡

立されば五歩に聲ある添水哉
案山子から苗一筋や秋の雨
草取し笠の辛苦をかゝし哉

田驛荒蕪

燒帛のけぶりのすゑに野菊哉
あし早き雲の蹴て行く鳴子かな
早乙女も引板曳秋と成にけり

題　美人

ことし米西施が胸に痞へけり
馬わたす舟にこぼるゝやとし米
聟入に樽提て來る新酒哉
駒迎當時の歌仙誰〳〵ぞ

源氏物がたりをよみける折ふし

物のあやも暮て猶吹野分哉
かなしさもやぶれかぶれの野分かな
野分の夕杜子美が褌はづれたり
乞食にも臥戸のあればのはき哉
雨風の夜もわりなしや雁の聲

題　雁字

きれ〳〵の雲や鴈ゆく五字七字
米蹈の腹寒き夜や雁の聲
井伊殿の御拳見ばや小鷹狩
落鮎や畠もひたす雨の暮
今は身を水に任すや秋の鱗
澁鮎を炙り過たる山家哉
捨るほどとれて又なし江鮭
鶉わたる桂のあした加茂の暮

信濃路を過るに

駕舁は畠ぬし也蕎麥の花
花そばや立出て見ればましろなる
二三升蕎麥粉えまほし我畠
花か穗かもみぢ歟蓼の紅ゃは
山河の野路に成行や蓼の花

九日

けふの菊秋の泣顏洗ひけり
太刀持の脊中に菊の日なた哉

愛菊

掛乞に八日の菊を見せにけり

不遠慮に公家の來ますや菊の宿
菊を見つ且後架借ル女哉
酒を出すうしろの音やきく畠
秋悲し白菊の色に染む事

田家

今いぬる隣の客に門の菊
此隣きくに琴彈ク門徒寺
丸盆に白菊を解く匂かな
わざくれに小菊買けり宵藥師

雲母坂を下りに

手折捨る山路の菊のにほひ哉
紫に似ずてゆかしき野菊かな

時雨のいそぎに此夜の月も憂勝なれば

空晴し月や最ひとつ牛祭

秋の月千々にこゝろをくだきゝて
こよひ一夜にたえずもある哉

月にたえぬ今宵ひと夜の寒かな

蕪叟判句合

後シテの面や月のやせ男

加賀の千代尼身まかりしと、息白烏よりせうそこせしかば

來る雁にはかなきとを聞夜哉

二柳が東行に

椎の實の落て音せよ檜笠

芭蕉庵にて

白露の百歩に茸を拾ひけり
紅茸やうつくしきものと見て過る

嵐山一周忌

鴫立てひとゝせふりぬ此ゆふべ

夕問墓所だつ濕のわすれ水
おもひ出でも袖はぬれけり　慧鶴和尚

蕪翁と曉臺が湖南の旅舍に遊ぶ。

さす月もあな冷じの九月幮

後苑

ひとりはえてひとつなりたる瓢かな
夕かぜやしぶ〳〵動く長ふくべ
草枯て人にはくずの松むしよ

渭堤の輻湊亭に、東行の離盃を とりて

殘菊にさめじと契る醫金香

蚺庵を立出るとて

歸來る日も松に見よ月の秋

於粟津芭蕉堂薙髪

稻刈て麥に田かへす我世哉

大魯判句合

痩臑に落穂よけ行聖かな
しばらくは北へ流れつおとし水

亡父二十五回法會　小序略

雨露の舍あればぞ法の秋

由男が舞臺納に

色かへぬ松のはれ着や蔦紅葉

山莊

手折置し紅葉かげろふ障子哉

桂州和尚の隱栖を尋て

何の木ぞ紅葉色こき草の中
さながらに紅葉はぬれて朝月夜

遊仁和寺

君知や花の林をもみぢ狩

梅ケ畑といふ山里にて

薪樵る山姫見たりむら紅葉

高雄山　二句

よし野丶櫻は一目に千もとの花を見そなはす。

一もとのひとめに餘る紅葉哉

紅楓深しみなみし西す水の隈

長月の末木曾の溪に分入に、丹山碧水羇旅の目をよろこばしめ、將また迅速の感をなさしむ。

かけはしにけふも墾あるもみぢ哉

周防國より信州へわたる天產僧と同行して、途中に別るとて

わかれ路や草の錦を裁おもひ

鳥居嶽

椽の木の秋を剝る丶あらし哉

朝寒に鉈の刃にぶきひゞきかな

あさ寒や水囉ふ家まだ起す

咳く人に蕎湯まいらする夜寒哉

めかれたる松茸市の夜さむかな

不淨說法したる僧にはあらで

市に出るひら茸うりは法師かな

茸狩の柴に焚る丶さくら哉

倣七步詩

柚を燒や味曾は釜中にありて泣

柿割て君おもふやのうらとはむ

懷古

むかし誰この堀越えし鴨脚ぞも

出るかと妖物をまつ夜長哉

たばこ干す寺の座敷に旅寐哉

秋靡

逢坂の町や針研夜半の秋

わすれられし女の暫く北嵯峨のしるべに身をよせゐしに

妓王寺へ六波羅の鐘や夜半の秋

長月三十日須磨の浦づたひして

はる〳〵と來てわかる丶やすまの秋

さらしな姨捨の邊に杖曳けるは九月盡の日也。

月の夜を泣盡してや果の秋

あはれとしの秋もいぬめり

勾當の身をなく宿や暮のあき

葬に鷺見たりくれの秋

費得眼前齋　剜郤心頭肉

行秋や五月に糶しとし米

冬を待といふ題にて

小鍋買て冬の夜を待數奇心

初しぐれ今日菴のぬる丶ほど

野風ふく室町がしら初時雨

吹上るほこりの中のはつしぐれ

信濃丶文兆が夕陽樓にて

雪見ゆる峯をかくして初時雨

難波女の駕に見て行しぐれ哉

遊金福寺

しぐれ過て草に落來ぬ松の風

杉たつる門に蚊の鳴しぐれ哉

羽織着て出かゝる空の時雨かな

しぐる丶や南に低き雲の峯

ゐなからどを西陣に伴て

錦織家見によればしぐれ哉
梅の樹の容(シヲチヲクリ)すはつしぐれ
疊屋のいなでぞありぬ夕しぐれ

芭蕉忌

俳諧に古人有世のしぐれ哉

義仲寺

枯〳〵て光をはなつ尾花哉

東武にありて深川芭蕉庵の正當會にあふ。

はせを忌や木曾路の痩も此ためぞ

善光寺の路人が家に客と成て、かゝる尊き御佛の邊近く旅舍せし因緣のありがたさに

朝毋の法りや旅寐の一大事

布子着てうれし貌なる十夜哉

藪寺や十夜のにはの菊紅葉

上京や月夜しぐるゝ御妙講

春坡が小松谷の別莊に遊て

紅葉ちるこのもかのものわすれ花

散はてぬもみぢもあるを冬の梅

稻づまの見えし夜明てかへり花

愚なる僧の祈りや歸花

藜太と東海寺に遊ぶ。

澤庵をやらじと門の紅葉ちる

東叡山

下りざまに又鐘きくや冬もみぢ

天府公侍座

しぐれ來て園のにしきを蹈日哉

長閑さに落もさだめぬおち葉哉

逃足に落葉蹈ゆく鳥かな

此かぜの夏はふかいで落葉哉

草庵

二度までは箒とりたる落葉哉

伏水下村氏にて

日の影の枯枝に配る落葉哉

大村鶴汀興行

元服の面起すやゑびす講

貞柳が歌よまぬ日や夷講

淺艸寺前紫陌紅塵

十月の春吹風や海苔の屑

三阿法師が喫茶會に招かれしに、あるじの風流、有馬涼及の趣にさもにたり。

口切の庵や寐て見るすみだ河

成美、あるじゝて、墨水の流に舟を泛ぶに、冬枯のけしきいと閑に、幽懷却客情を惱す。

我舟におもて合せよ都どり

闇を鳴く沖のちどりや飛ぶは星

水鳥や墓所の火遠く江にうつる

野の池や氷らぬかたにかいつぶり

春坡興行に

影うつる鷲のふすまやよばひ星

貫之が船の灯による千鳥哉

明石の浦浪夕陽に映じ、淡路島山咫尺に有。

夕衛手にも來るかと淡路しま

鎌倉の袖が浦にて

裾ぬるゝ浪や七里がはまちどり

ゑのしま

霜いたし草鞋にはさむうつせ貝

不蕉公へはじめて召されけるに季吟芭蕉其角の三筆を御床にかけられたり。

俳諧の三神こゝに冬ごもり
書棚に塩辛壺や冬籠
さかしらいふ隣も遠く冬籠

長檠八尺空自長

短檠は二尺のものでふゆごもり

自悔

冬の夜や我に無藝のおもひ有
まらう人に炭挽すがた見られ鳧

碧雲引風吹不斷
白花浮光凝碗面

茶の花の香や葉がくれの玉川子
茶のはなに喜撰が歌はなかりけり

對漆翁紹朴

爐びらきや紅裏見ゆる老のさび
口きりや此寒空のかきつばた

白石城主君の御需により、二見文臺のうら書をつかふまつりし御報ひに、竹島といふ所の竹をもて爲に製せさせ給ふ花器を給はりけり。はた松島と申銘字御名判等も御染筆のよしきこえさせ給ふに、いと有がたく頂戴し侍る。

わが庵ににほひあまるや冬牡丹

水落石出

冬川にむさきもの啄む烏哉
初霜や烏を懼すからす羽に
はつ霜や野わたしに乘馬の息
舟慕ふ淀野の犬やかれ尾花

芝泉岳寺懷古

石寒し四十七士が霜ばしら

尾上鐘

此かねや袖が摺てもさゆる也
紙衣着ていろは教る御僧哉
遠く遊ぶ子に囉ひたる紙子かな
四ッに折て行李にあまる衾かな

戀

恨寐の蒲團そなたへゆがみけり

疊むとて主客爭ふふとん哉
畫も見るつれなき人の蒲團哉

花美を好む老人の剃髮したるに

丹頂の頭巾似あはむ霜の鶴

箱根にて

關越えてうれしく被く頭巾哉

少年行

頭巾くれし妹がりゆく夜霙ふる
づきん懶く切られし髮を懷に
おちぶれて關寺謠ふ頭巾哉
頭巾着し戲男うつる鏡かな
紅閨の足につめたき頭巾哉

野行

背に比叡のはなれぬ寒かな
明ぼのやあかねの中の冬木立
冬木だち月骨髓に入夜哉
草の葉の霜より明て山かづら
結構な天氣つゞきや艸の霜

海寶禪寺

鶯のうしろ影見し冬至哉
いまそかりし師の坊に逢ふ枯野哉
鰒喰し犬狂ひ臥かれ野かな
皮剝の業見て過る枯野哉
大佛を見かけて遠き冬野かな

大根引といふ事を

大風呂の貝ふく迄や大根曳
大根引こゝら畠の字かな

淺間の麓を通けるに、燒亡の後三とせの春秋を經けれども、木草生ぜず、大石なども灰にうもれて、うすひ峠を越に、駕かくものゝ申けるは、一丈斗も下に赤き土の見え侍る邊リぞ其昔の道也と。田畑などは燒砂を高く撒よせたるまゝにて、只いたづらに茫々たり。

土までも枯てかなしき冬野哉

柏山眺望

こがらしや三ツに裂たるちくま川
風にあらそふごとし鐘の聲

慶子上京に

顏見せや北斗に競ふ炭だはら
かほみせや矢倉に起る霜の聲

江戸にて

顏見せやしばらく冬の初日影
煎蠣に咲や此花蕗のとう
鰒を煮る汁なむ〳〵とこぼれけり
河豚好む家や猫迄ふぐと汁

燈下獨酌

煮凍や精進落るかねのこゑ
煮氷やもろく折たる萩の箸
活て居るものにて寒き海鼠哉

敏馬浦客中

瘦葱にさかな切込磯家かな
砂を吹家の棟川や冬下風

島田の千布は驛東也ければ、臺輿など下知して嚴重に大井河の岸まで送らる。

やすき瀨や冬川わたる鶴の脛

金谷の庄家河村氏は古舟といへる俳士にて、曾祖父は如舟といふ芭蕉翁の門人也。一とせ嵐雪此家にとまりて、

大井川に舟あるごとし花の雪

といふ句を殘せりとぞ。予もせちにとゞめられて

かさゝぎの霜のひと夜をやどり哉

驗府の時雨窓に三日杖をとゞめて、一夜葛人が樓上に更る迄酒うちのみて

沖津鯛冬の山茨もたゞならね

熱田奉幣

馳折をしばらくおろす神樂哉
夜神樂や水涕拭ふ舞の袖

葬太魯

人をして咒(なが)しむ霜のきり〳〵す
初雪のしるしのさほや艸の莖
はつゆきや靑物市のよめがはぎ

甲辰冬、別莊にをの〳〵をまねき、一夜はいかい催しけるに、明がたより初雪の降出ければ

幸のこぼるゝ雪や草の戶に

商人のよき蔵いやしけさの雪

恐是五俟家

誰門ぞ雪に寐ぬ夜の魚の骨
盤銅の火は炎〳〵と雪見かな
たゝずめば猶降ゆきの夜道哉

原　驛

富士に添て富士見ぬ空ぞ雪の原

薩埵峠望嶽亭

晴る日や雲を貫く雪の富士
鮮き魚拾ひけりゆきの中

畵　賛

鳥羽殿へ御歌使や夜半の雪
池水にかさなりかゝる深雪哉
駕の戸の右も左もみゆきかな
いたく降と妻に語るや夜半の雪

青樓曲

二日見る雪の迎や手代ども

倣古今集物名　春雪

しなのぢや小田は粉雪に蕎麥畠

題　田家

柊の角をかくすや今朝の雪
旅人に我糧わかつ深雪哉

鬱樂、孝子を養て老の後を樂し
まるゝを、竹によせてことぶく
とて

杖と成たかうな得しや雪の中

浪速人、手飼の犬を亡ひしを深
く惜みて、追悼の句を乞けるに

足跡の梅花なつかし雪の朝

古硯銘

鈍きもの先氷るなる硯かな

題　畫

平仲が空泣おかしうす氷
出る日や風に吹るゝ薄ごほり
かたぶきし水彌氷る盥かな
わきも子が油こぼれり玉楯筍

郊　外

寒き野を都に入や葱賣
春秋をぬしなき家や石蕗花
炭屑に小野ゝ枯菊にほひけり

苦哉名利人
樂矣乞兒身

から鮭に名利のあぶらなかりけり
乾鮭や挽ば木のはし炭の折

去來七十年忌

まねし人のゆかしや夜半の鉢叩

戀

凍へ來し手足うれしくあふ夜哉
胼の手を眞わたに恥る女かな

樗良が僑居を訪て

うづみ火を手して掘出す寒かな
妻の留主に煮凍さがすあるじ哉
鬱義をして皆足出さぬ巨燵哉
夜着かけて容(かたち)いぶせきこたつ哉
朔日や聟どのわせてたまご酒
納豆汁必くるゝ隣あり
をの〳〵の喰過がほや鯨汁
むづかしと今宵はやみぬくすり喰
藥喰おぼつかなさに人誘ふ

鳴海の千代倉が門前を乘打すと

て

盃は預けおくなり冬の梅

所思　番名にて

白魚やさぞな都は寒の水

寒月や行ひ人の赤はだか

寒月に照そふ闘のとざし哉

寒聲やあはれ親ある白拍子

寒垢離やひとゝせ見たる角力取

書賛

守武の水沸おとす火桶かな

火桶抱て艸の戸に入あるじ哉

駙(ゆび)拇の身を墨染や桐火桶

足袋賣の聲うち曇師走哉

水仙にたまる師走の埃かな

英が書に

枯尾花醜き小町臥りけり

酒を聖賢としてロかしこき男あり。

師走ぞと呵る妻あり舌ありや

餅搗の日も幸齋が茶湯かな

醉李白師走の市に見たりけり

亡父大祥忌

俤の三とせをいだく紙衣哉

、十三周

月雪に集てかなし筆の物

右は其俳影集に遺句七十余をもて、百韻を綴りし意を述侍る也。

、二十五回

寒月にうつし見む我かこち顔

哭亡師　終篇記略之

から檜葉の西に折るゝや霜の聲

、期年

おこたらぬ月日の數珠や一廻り

松浦公直遷暦賀　寄松祝

松千とせ算へもどせや古ごよみ

人住ずなりぬはしらの古暦

老懐

わかき人に交りてうれし年忘

除夜、青樓に遊ぶ。

年かくすやりてが豆を奪ひけり

醉て寐た日の數〳〵や古暦

うそ寒う蠶めし喰ぬ煤拂

行としや古傾城のはしり書

としの暮さる御方へ招かるゝ

春屆く文したゝめつとし籠

大路のさま松立わたし、行かふ人のあはたゞしげなる中に、家〳〵の神わざいとまめやかに見ゆるぞ、またなくめでたき心地のせらる。

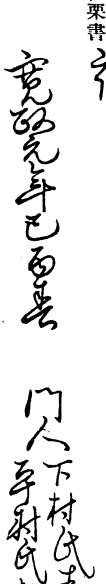
年ひとつ老ゆく宵の化粧かな

八十の老に親ありとし木樵

跋

昔の五元集は其角先生自撰び、みづから淨寫して匝底にありしを、傳て人の祕藏し侍し也。さるを、年經て延享の頃、旨原なる人乞得て梓行し、世にあらはれしもの也とぞ。夫よりかみつかた、あるは今の人も、家〻の句集すくなからずといへども、多くは後人の意に預る所にして、晋子自撰の如き花實配當變化自在なるは、彼五元集を權與と謂つべし。春師や春夜といひし弱冠の頃より蕉門の深きを探

り、晋子のひとゝなりを慕て筆意を摸し風韵を學のこゝろざし大なりしかば、彼五元集に倣ひ家の集を筆記せり。人たまゝ乞て閲せんことを望めば、師云、いまだ稿を脱せず、自得の期を待べしと。余其春秋を待に日あらんことを歎じ、しきりに勸て先初編を木にゑらせ、三都の書肆に託す事とはなりぬ。

寛政元年己酉春

門人　下村氏春坡識
　　平村氏杜栗書